国立感染症研究所感染症疫学センター作成

第三部　インフルエンザ入院サーベイランス

- インフルエンザ入院サーベイランスに報告された症例数を2018年第17週時点で比較すると、前シーズンと比較して、今シーズンはすべての年齢群で報告が増加し、60歳以上の年齢群で約2倍の報告がありました。この年齢分布は、過去3シーズンとは異なる状況でした。
- 今シーズンのピークは全年齢群で高く、特に60歳以上の入院患者数は増加しました。一方、入院時の医療対応の割合についてみると、全年齢群で、前シーズン、前々シーズンと同程度の割合でした。

✧　インフルエンザ入院サーベイランスの概要

全国約500か所の基幹定点医療機関は、2011年9月より週1回、インフルエンザの入院症例の情報を地方自治体に届け出ることになっています。基幹定点医療機関における、インフルエンザによる入院患者の発生状況や重症化の傾向を継続的に収集し、国が集計した情報を医療機関へフィードバックすることにより、インフルエンザの診療に役立てることを目的としています。情報収集している項目は年齢・性別以外に、重症度(肺炎、脳症など)の指標となる入院時の医療対応（ICU利用、人工呼吸器使用、頭部CT、脳波、頭部MRI）の有無です。なお、基幹定点医療機関とは、患者を300人以上収容する施設を有する病院であって、内科および外科を標榜する病院（小児科医療と内科医療を提供しているもの）を2次医療圏毎に1か所以上、基幹定点として指定しています。

✧　報告症例数

2015/16 シーズン以降の各シーズンにおける男女別の報告症例数は以下のとおりです。

表１：各シーズン(第17週まで）における基幹病院定点からの男女別報告症例数—インフルエンザ入院サーベイランス

	2015/16 シーズン	2016/17 シーズン	2017/18 シーズン
男性	6,648	8,170	11,232
女性	5,406	7,062	9,352
総計	12,054	15,232	20,584

各シーズンにおける年齢群別の入院患者数を以下に示します。2017/18シーズン、前シーズン、前々シーズンともに第17週までを集計しています。

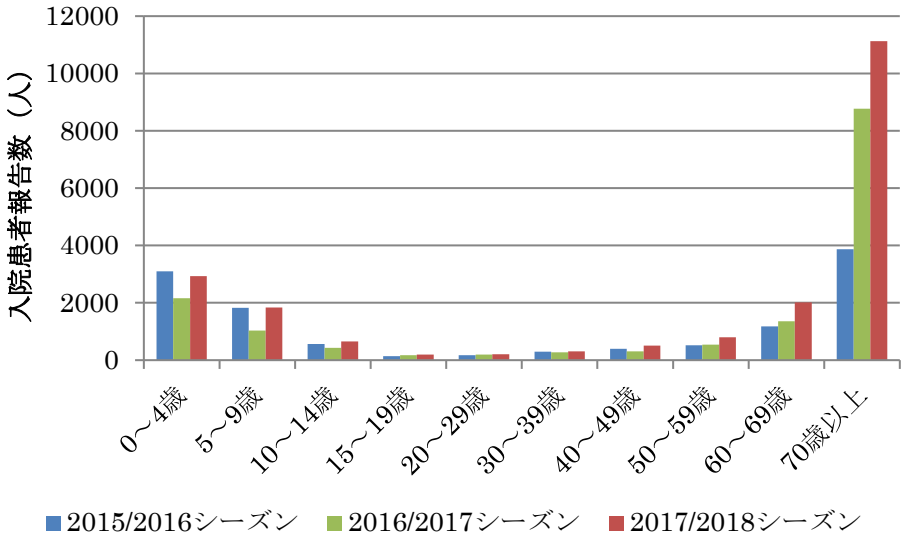

図 7：各シーズンの年齢群別報告患者数（各シーズン第 17 週までの集計）-インフルエンザ入院サーベイランス

今シーズン（2018 年第 17 週現在）のインフルエンザ入院サーベイランスにおける報告数は、この 3 シーズンでは最も高くなりました（表 1）。すべての年齢群における報告数は前シーズンよりも増加しました。特に増加が多かったのは、0～4 歳、5～9 歳、60 歳代、70 歳以上の年齢群です。今シーズンは様々なウイルス型が同時流行したシーズンで、報告数も年齢分布も過去 3 シーズンとは異なる傾向でした。小児と高齢者の両方に多く、特に 70 歳以上の報告数が多い分布となりました。

表 2 にシーズン全体の（2017/18 シーズンのみ第 17 週まで）基幹病院定点におけるインフルエンザ入院患者数（単位：人）と国全体のインフルエンザ推計受診者数（単位：万人）との比を示します。0～14 歳群では、前々シーズンの報告数と比を比較すると、今シーズンは、推計受診者数が多い一方で、入院患者数は少なく、比は前シーズンと同様に低い傾向がみられました。一方、60 歳以上群では、前シーズン・前々シーズンの報告数を上回りましたが、前シーズンと比較すると、比は低い傾向がみられました。

表 2　各シーズンのインフルエンザ入院サーベイランスの年齢群別報告症例数（単位：人）とインフルエンザ推計患者数（単位：万人）の比

	2015/16 シーズン	2016/17 シーズン	2017/18 シーズン（17 週まで）
0～14 歳	7.2(5,561/775)	5.8(3,848/664)	5.8(5,422/928)
15～59 歳	2.3(1,552/664)	2(1,554/766)	2.1(2,017/943)
60 歳以上	30.8(5,151/167)	40.1(10,417/260)	36(13,144/365)

今シーズン、前シーズン、前々シーズンの基幹定点医療機関における週別の入院患者数の推移を検討すると、2017/18 シーズンでは 2017 年第 49 週以降急速に報告数が上昇し、3 週頃にピークが見られ、定点報告と同様の傾向でした。その後はピーク後の減少傾向は速やかでした。2017/18 シーズンにおいては、60 歳以上が大きなピークを形成している傾向が見られました。

今シーズン、前シーズン、前々シーズンの各年齢群別の入院患者数の推移を示すグラフを以下に示します。

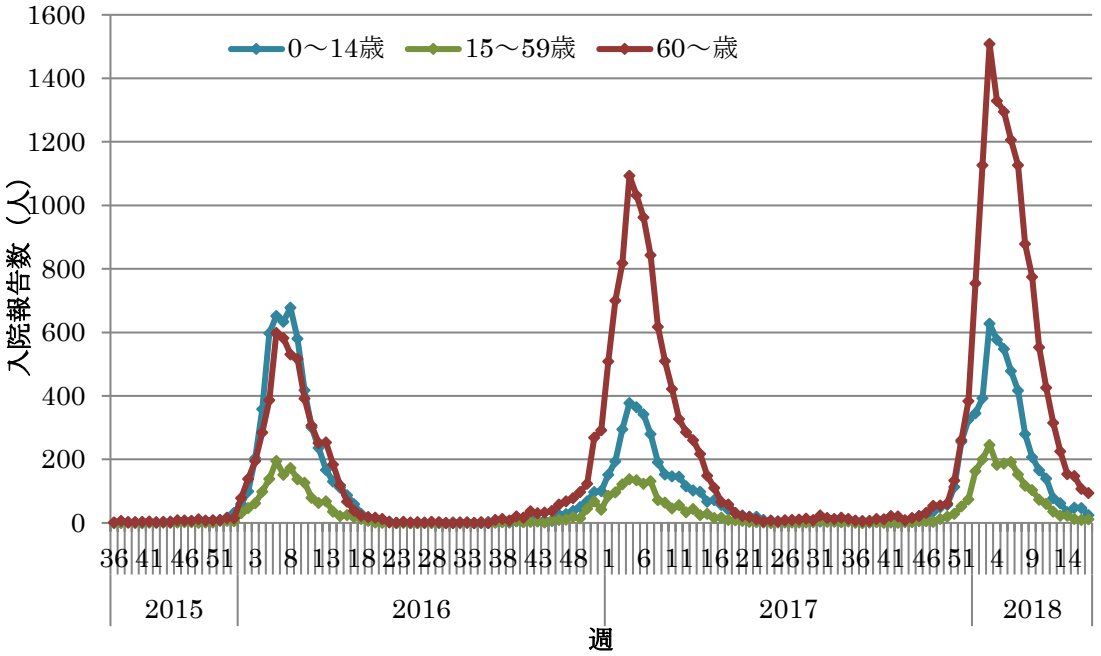

図 8：週別・年齢群別報告症例数（2015 年第 36 週～2018 年第 17 週）—インフルエンザ入院サーベイランス

0～14 歳のピークレベルを比較すると、今シーズンは、ピークレベルは 600 人程度であり、この 3 シーズンでは 2015/2016 シーズンに次ぐ週あたり報告数でした。15～59 歳においては、入院患者のピークレベルはこの 3 シーズンで最も多く、200 人を超えていました。60 歳以上の年齢群のピークレベルは、過去 3 シーズンで最も高く、急峻ながらピーク後での裾の広いグラフを示し、60 歳以上の年齢群における報告数の増加が示されました。

各シーズンの入院時の医療対応の実施状況の主なものを以下表 3 にまとめます。表中の%表記は、それぞれの項目について「あり」の数を、それぞれのシーズンにおける各年齢群の報告症例数（表 2 参照）で除しています。

表 3：各シーズンの年齢群別の入院時の医療対応の実施状況—インフルエンザ入院サーベイランス

医療対応	年齢群	2015/16 シーズン		2016/17 シーズン		2017/18 シーズン（17 週まで）	
		あり	%	あり	%	あり	%
ICU 利用	0～14 歳	118	2.1	101	2.6	138	2.5
	15～59 歳	86	5.5	73	4.7	107	5.3
	60 歳以上	236	4.6	376	3.6	527	4.0
人工呼吸器使用	0～14 歳	82	1.5	59	1.5	89	1.6
	15～59 歳	58	3.7	47	3.0	62	3.1
	60 歳以上	173	3.4	296	2.8	406	3.1
頭部 CT	0～14 歳	643	11.6	489	12.7	556	10.3
	15～59 歳	109	7.0	118	7.6	165	8.2
	60 歳以上	466	9.0	969	9.3	1268	9.6
頭部 MRI	0～14 歳	263	4.7	168	4.4	232	4.3
	15～59 歳	41	2.6	49	3.2	73	3.6
	60 歳以上	121	2.3	216	2.1	296	2.3
脳波	0～14 歳	214	3.8	176	4.6	216	4.0
	15～59 歳	15	1.0	21	1.4	24	1.2
	60 歳以上	20	0.4	21	0.2	47	0.4

2017/18 シーズンでは、60 歳以上の入院患者数（表 2、図 7）や入院時の医療対応（ICU 利用、人工呼吸器使用、頭部 CT、頭部 MRI、脳波）を必要とした数（表 3）は、2015/16 シーズンの 0～14 歳群の頭部 CT と MRI 以外は増加していましたが、入院した患者における各医療対応の実施割合を見ると、前シーズン、前々シーズンと比較して、全体としてほぼ同程度であることが示唆されました。